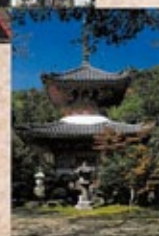


# 歴史ガイドブック

近くにあるのに、知らない「みたき」がたくさん！  
これを読めば、もっと「みたき」が好きになる！！



# みたき



広島市西区

三つの瀧に幾夜うたせて龍泉寺  
胸の佛の姿みるまで  
春は花秋は紅葉のみたき山  
夏の瀧津瀬冬の思ひで

歴史ガイドブック  
**三つたき**

もくじ

① 概要	2
② 旧三篠村	4
③ 三瀧寺(三滝観音)	5
④ 三滝参道	
・四国八十八力所(三瀧寺)	14
・十六羅漢(三瀧寺)	24
・十三仏さま	27
・西国三十三観音(三瀧寺)	28
⑤ 日涉園跡(市指定史跡)	30
⑥ 親鸞聖人像跡	31
⑦ 誓願寺	33
⑧ 海雲寺	35
⑨ 三篠神社	38
⑩ 三滝本町地藏尊(歯痛地藏)	40
⑪ 軽便鉄道可部線	41
⑫ 太田川放水路	44
⑬ 三滝山と登山コース	48



## 1. 概要



昭和35年(1960年)頃の三滝本町

三滝地区は明治になるまで安芸国沼田郡新庄村と呼ばれていました。

それより古くは太田川と山手川に挟まれた島があり、これを「別府の庄」と呼び、これが今の三篠地域の始まりです。

明治31年(1898年)に沼田郡が安佐郡に変わり、明治40年(1907年)合併して生まれた三篠村もやがて三篠町と呼び名が変わりました。

昭和4年(1929年)広島市との合併を経て、昭和8年(1933年)に初めて三滝町と呼ばれるようになりました。

昭和42年(1967年)太田川放水路が完成し大きく地域が分断され、放水路の東側を三滝町、西側をこちらが本家とばかり三滝本町としました。しかし名前の由来である三つの滝と三瀧寺の所在地が三滝本町三丁目となるので、総本家らしく三滝山として独立させ、昭和45年(1970年)から三滝町、三滝本町及び三滝山の三つの町となりました。

公に発行されている地図で最も古いものは明治31年(1898年)版で、(財)日本地図センター発行の「地図で見る広島の変遷」で見ることができます。当時は住民が住んでいたのは広瀬、中島、国泰寺と平塚辺りまでで、それより海側は沖新開と呼ばれていました。

山陽鉄道横川駅ができたのは明治30年頃で、可部線にいたっては私鉄として横川—祇園間が開通したのは明治42年(1909年)になってからです。明治38年(1905年)2月5日には日本最初の乗り合いバスが横川—可部間を走っています。



平成17年(2005年)に復元された日本最初の乗り合いバス

## 2. 旧三篠村

今の祇園、長束、新庄町地区より、楠木、打越、己斐(こい)にかけての一带(いわゆる五箇荘時代の別府の庄)は昔「川の内」地区の中心であり、広島城築城前の三篠の姿のひとつです。

三篠地区は古くは「安芸国沼田郡」の中にありました。「芸藩通誌四十五」によれば「沼田郡は藩府の西北にありて府も元は当郡の内なれど、今別管府となれり、郡の所管の広さ四里、東は八木村より、西は山本村に至る。五里余り、南は打越村より、北は小河内村に至る」と書かれています。

広島城ができるまでは、安芸国の府は沼田郡の武田山上に築城された銀山(かなやま)城の城下町にありました。最初の城下町は沼田郡の中心に位置した今の祇園町で、武田氏がこれを支配しました。



昭和十三年(1938年)大広島市街地図

武田一族と大内及び毛利軍が戦いを続けているうちに、武田一族内で戦術上の意見の食い違いがおこり武田陣営の力が衰え、天文10年(1541年)ついに大内及び毛利の軍勢に滅ぼされました。

その後広島城を築城した毛利元就の孫輝元も別府の庄については一定期間年貢を免除して新田開発を奨励しました。

## 3. 三瀧寺(三滝観音)

三滝は弘法大師が「まこと聖地なり」と言ったと伝えられ、美しい自然に恵まれている場所です。

JR三滝駅から南へ少し下がり、右手の坂を上ると桜並木があります。この道に沿う小さな流れは水量は少ないけれど都市近郊には珍しく清らかな水が流れています。この坂を上がりつめると多くの人たちに「三滝の観音さん」として親しまれている三瀧寺(真言宗)にたどり着きます。

三瀧寺の境内には、その由来となっている三つの滝の瀬音が響き、また深山幽谷の趣きも深く人々の心をやわらげ、憩いの場となっています。(初夏の青もみじ、秋の紅葉は殊に美しい)

旧参道に一番観音があり、境内に入り本堂までの参道に沿って三十三体の摩崖仏(まがいぶつ)観音像や多くの小さな石仏、そして原爆慰霊碑にまじって著名人の詩・和歌・俳句の文学碑も訪れる人たちに安らかな情景をあたえています。

## 三瀧寺散策

その一

### 三つの滝

かつて“雌瀧”“雄瀧”“駒が瀧”という名がつけられていましたが、今は“幽明(ゆうみょう)の滝”“梵音(ぼんおん)の滝”“駒が瀧”と呼ばれています。中でも雄大なのは“梵音の滝”で茶室の前の約50メートルの絶壁から落ちてくる滝の様は誠に見事です。

### 多宝塔(県重要文化財)

境内に入り、参道の右手石段を登ると、緑の中に朱塗りの姿で美しく建っています。原爆犠牲者の供養のため昭和26年(1951年)広島に移築されました。この塔はもと和歌山の広幡神社の境内に建てられていたものです。塔の心柱には大永6年(1526年)に建立されたと記されており、室町時代の創建です。

三間四面、本瓦葺二層の多宝塔は和様と唐様の折衷様式で、墓股(かえるまた)や下層の柱、上層の亀腹(かめはら)など室町期の建築様式をとどめる美しい塔です。

またこの塔に安置されている「木造阿弥陀如来像」(国重要文化財)は藤原時代の定朝(じょうちょう)様式の作風がよくあらわれています。

この仏像は大阪河内の日野村から移されたものです。像の胎内銘には「仁平4年(1154年)11月河内国日野村の人々が観心寺に寄進した」とあります。檜材を使った寄木造りで漆に金箔をおく仕上げで、長い年月を経た今日でも金箔がおだやかな輝きを見せています。



※定朝は平安時代中期の仏師で、その優美な様式は長く日本の仏像彫刻の規範とされ寄木造りの技法を大成しました。天喜元年(1053年)に制作した阿弥陀如来像が平等院鳳凰堂に残っています。(出典:大塚雄)

### 想親観音堂

「想親(そうしん)」と言う名前は江戸時代に唄われた数え歌『廣島心願成就八景』に出ており、亡くなった親を偲んでお札を納める庶民信仰がその根底にあると言われています。

石仏三体が祀られており、中央の十一面観音像が最も古い石仏です。最初の観音堂は江戸時代に建てられました。現在の観音堂は明治初期に再建され、現在でも多くの人たちがお参りをしています。



### 「慈眼橋」＝「福寿橋」

清水寺管長 大西良慶(おおにしりょうけい)さんが、三瀧寺にお参りされた際に、行きは「観音さまの慈悲の目」帰り「福があつまるように」と一つの橋に二つの名前が付けられました。大西良慶さんは、鹿児島県に生まれた日本初の五つ子の名付け親としても有名です。



慈眼橋(じげんばし)



福寿橋(ふくじゅばし)

## 三瀧寺散策

### 鐘堂 (かねどう)

昔の鐘は第二次世界大戦中に供出したため終戦後すぐに現在の鐘を鑄造しました。当時は材料の品質が悪くヒビが入っています。

それを鑄造した梵鐘屋から「現在は良い材料があるので、無償で新しく鑄造したい」と申し出がありました。ヒビも当時を知る歴史的な意味があると思われるので再鑄造せずに現在に至っています。



### 龍神堂

三瀧寺は正式な名称を「龍泉山・三瀧寺」と言い、この谷間と清流があたかも龍が住む泉のようであることから、昔から龍神様を祀っています。

開創千二百年記念事業として、当山の趣に相応しい昔ながらの龍神堂が建設されました。

アジア全域において龍神様は水や雨を司る神であり、三瀧寺は龍神様を祀ることで千二百年間佛法の燈を伝えています。



## その二

### 茶堂 (さどう)と補陀落の庭



この敷地内には普段は入れませんが正月三が日もみじ祭り(11月18日～23日)のみは三瀧寺にお参りをする人に解放され、お茶が振舞われます。これは慈善の精神による催しで、30年以上前から行われており、皆様から頂いた浄財はすべてアジアの子どもたちに贈られています。

茶堂は昭和50年代初期に建てられましたが、「補陀落の庭」は元あったものを昭和30年代後半に庭師重森三玲氏の設計で整備されました。「補陀落」は観音様の浄土(インドではポータラカと呼びこの音から「ほだらく」と漢字を当てた)の意味で、三瀧寺のご本尊が観音様であることから「補陀落の庭」と名付けました。

この茶堂に宿泊されたお客様には有名なダライ・ラマ法王十四世などがおられます。

### 本坊

旧本坊は、戦後間もない昭和22年(1947年)に着工しました。建設資材も乏しい時代で広島市長が先頭に立ち、多数の広島市民が建設に協力して約1年で完成しました。当時は被爆直後であったため、近隣の人たちが集まる場所として使われました。旧本坊は完成後約60年を経過して老朽化しており、大同4年(809年)の三瀧寺開創から1200年にあたる平成21年(2009年)に改築されました。



旧本坊

## 三瀧寺散策

### 六角堂

このお堂は弘法大師の千五百年の御遠忌(三十三回忌以上の遠い法会)の記念事業として建設されました。三瀧寺は、本堂にたどり着くまで登り坂が続くので、中ほどで休憩をする場所としても役立っています。



### 三鬼権現堂及び鎮守堂

文政9年(1826年)に国泰寺十七世 猛山實勇(もうざんじつゆう)の弟子であった明禪(みょうぜん)がわずか15歳で三滝山に入山し、その後明治17年(1884年)まで50数年間を通じて想親観音堂の再建、鐘堂の建立等により三瀧観音(龍泉寺)を再興しました。これを引き継ぎ、宮島弥山で修行して徳を得た国廣(くにひろ)四鬼神(よきじん)(備後の生まれで明治37年没)が入山して、山手川に三滝橋を掛け、鎮守堂を再建、さらに現在の位置に三鬼権現堂も再建し、政府所有の上地林(じょうちりん)の返還を願い出る等を行ったので、徳が高いことから信者たちが四鬼神と師を呼んで尊敬しました。国廣四鬼神の弟子であった佐藤要憲(ようけん)(元治2年に豊後で出生)は師の遺志を受けて本堂の修築、鎮守堂拝殿や毘沙門堂(大正時代の大水害で流出し現存していない)を再建し、参道の改築、保管林の設定や照明用電灯の敷設を行って三瀧寺の風貌を一新しました。

現在でも本堂(観音堂)のみならず三鬼権現堂や鎮守堂にもたくさんの人たちがお参りをしています。



三鬼権現堂(さんきごんげんどう)

### 本堂



参道沿いの自然のたたずまいを心にとめながら最後の石段を登りつめると、平安時代の建築様式の粋を集めた本堂があります。

終戦直後にご本尊を本坊に安置し、旧本堂を解体して現在の本堂は昭和49年(1974年)に完成しました。

本堂内には、本尊の聖(ひじり)観音像をはじめ観音菩薩などたくさんのお像が安置されています。その中の「木造阿弥陀如来坐像」(市指定文化財)は像高29cmの寄木造りで、小さいながら端正典雅な仏像で室町時代の作です。

また鑄造製の鎌倉時代の密教修行の仏具「金銅五結杵(こんどうごこしよ)」(市指定文化財)があります。



金銅五結杵